

定期刊行物登録
第三種郵便物認可
平成26年6月1日発行
(毎月18日発行)
第133号
(酒井388)

2014
6

新潮45

「膨張中国」
世界を侵蝕する

特集

プリニウス
ヤマザキマリ とり・みき

連載
快調!

小畠峰太郎
「山中伸弥追い落とし」の策謀

深層追及第三弾

笛井と理研が仕掛けるSTAP戦争

続・何様のつもり

特集

セウォル号事故から見る
韓国という国 黒田勝弘

プロ意識をなくした教師たち 尾木直樹

対談 いつまで「若者」で
いつから「大人」? 酒井順子×古市憲寿

玄孫に伝わる 清水次郎長のリーダー論

高田明和たかだあきかず
浜松医科大学名誉教授

幕末は東海道の大親分、明治になつてからは実業家として活躍した
清水次郎長。彼には現代にも通じるリーダーとしての素質があつた。

廣沢虎造が「旅ゆけば駿河の国に茶の香り」と歌つて一世を風靡した浪曲も、今は一部の愛好家以外には関心がもたれなくなつてゐる。この浪曲に唄われた清水次郎長というのはどのような人物であろうか。言わずと知れた幕末・明治の侠客で、過去には映画やテレビなどで映像化もされている。その人物像を紹介することは今も意味があるのだろうか。

実は、私の祖父は次郎長の孫にあたる。清水次郎長こと、山本長五郎は文政3年（1820年）1月1日、有度郡清水町の廻湯問屋を営んでいた高木三右衛門と

とよの間に次男坊として生まれた。長女はとり、次女がとみ、長男は佐十郎、次男の長五郎が後の次郎長である。

とよの弟である山本次郎右衛門（次郎八）は有度郡清水町で米屋（甲田屋）を営んでいたが、子どもがなかつたので、ぜひということで長五郎を養子に迎えた。次郎長という名前は「次郎右衛門の養子となつた長五郎」を縮めたものである。

次郎長には子どもがなかつたが、兄の佐十郎は五人の子持ちであつた。次郎長はまつを養女として迎えて当時出入りしていた辻村の呉服屋の高田元吉に嫁がせた。次郎長には子どもがなかつたが、兄の

虎次郎の妻いそは、次郎長の話を舅の元吉、夫の虎次郎から聞かされていた。また、後に次郎長の養子となり、廣沢虎造の浪曲「次郎長伝」の元になつた『東海遊侠伝』を書いた天田五郎（後の歌人・天田愚庵）からも耳にしていた。昭和35年まで生きていた彼女は、それを孫である私に伝えることを自分の使命と考えていたようであつた。

次郎長は博徒の親分であつたが、この後半生は清水の発展のために尽くした実業家でもあつた。その姿は現代の理想的なリーダー像とは必ずしも一致しないの

1935年静岡県生まれ。慶應義塾大学医学部卒業。医学博士。ニューヨーク州立大学助教授、浜松医科大学教授を歴任し、2001年、浜松医科大学名誉教授。専門は大脳生理学・血液生理学。

だが、だからこそ歐米化されたリーダー像がもてはやされる今日において、参考になるのではないかと思う。

そこで本稿では、祖母から聞いた話を参考にして、現代社会にとつてもっと重要なキーワード、「リーダーの素質」という観点から次郎長を論じてみたい。

時代を見る眼

明治に入つて次郎長は静岡藩の権大参考事をしていた山岡鉄舟と知り合いになつた。幕末、新政府軍から攻撃された咸臨丸の船員の遺体が港に放置されていた。次郎長は賊軍の遺体を埋葬したこと、新政府軍から咎められたが、「死者に官軍も賊軍もねえだろう」とつづねた。幕臣だった鉄舟がその件を次郎長に感謝したため、二人の交際が始まった。以後、次郎長は鉄舟の影響を大きく受け、また鉄舟も侠客、次郎長の生き方には驚かされたようである。

前述したように、武士から禪僧となり、歌人としても有名になつた天田愚庵（五郎）に次郎長の「伝記『東海遊侠伝』」を書

かせ、出版させたのも鉄舟である。この本の題画は鉄舟と勝海舟が描いているくらいなのだ。さらに鉄舟は次郎長を西郷隆盛にも紹介した。また、五郎も西郷とは面識があった。その時のいきさつを次郎長は次のように述べている（以後、ヤマカギ内が祖母からの話）。

（もともと天田五郎は戊辰戦争で生き別れになつた母と妹を探すために日本国内を回り、最後には敵方であつた薩摩の兵士とともに台湾出兵にも参加した。それがきっかけになり、西郷の腹心とされた桐野利秋と知り合いになり、桐野は五郎を西郷に紹介した。

桐野が五郎を連れて、西郷の家に行き、「桐野でごわす」と大声で名乗ると、西郷が「入いりやつされ」と声を出した。居間に通されると、西郷が出てきて、五郎の前に両手をついて、「西郷吉之助でごわす」と丁寧に挨拶した。

五郎に挨拶をすると、西郷は、「おはんが戊辰の戦で別れた親御兄弟を探しているという天田さんでごわすか。桐野さんはそこまで来て、いつしょに風呂に入つたよ。後で、書を書いてくれとい

五郎は今までの苦労を語ると、西郷は黙つて聞いていたが、途中から目に大粒の涙を浮かべていたという。そして桐野にも五郎の家族を探すためにもつといろいろな人に会いなさいと告げた。

話は鉄舟のことになった。西郷と鉄舟に對して、徳川慶喜は恭順の意を表すべく、東征大総督府參謀の西郷隆盛に使者を送ろうとした。白羽の矢が立つたのが山岡鉄舟だつた。一人官軍に乗り込んだ鉄舟は駿府で西郷に会い、慶喜の意向を伝えたとされる。五郎から鉄舟のことを見くと、西郷は、

（山岡さんはもつとも懐かしい人だ。あの人を天皇さまの侍従にすれば、きっとよい教育をされるだろうと思つてしまつた。維新後には山岡さんは政治には入らなかつたので会う機会は少なかつた。昨年天皇さまの使者として来られた。その時にはわしは湯治に行つてゐた。山岡さんはそこまで来て、いつしょに風呂に入つたよ。後で、書を書いてくれとい

ので二、三枚書いたかな」といかにも懐かしそうに話した

五郎はいつまでも居てはお疲れになるだろうというので、いとまごいをしたが、西郷は玄関を出て、ずっと見送っていたのだという。

その後五郎が縁あって次郎長の養子になつたある日、五郎は西郷に会つた話をした。すると次郎長も山岡に連れられて西郷に二回会つたと言つた。

（二度は明治4年頃と思うが、山岡先生が明治天皇の侍従になるというので、その挨拶に伺つた。日本橋の蠣殻町の屋敷だったと思う。西郷さんに会うと、両手をついて「西郷吉之助でござます。おはんが次郎長さんでござますか。話をよく聞いております」と言うのだ。後の陸軍大

将がまるで同僚に話すように話したのに驚いた」と次郎長は言つた。また一度この時は征韓の話で西郷さんが江戸から離れるということで、話を聞きにいったようだ。「難しい話だつたよ。その時もこちらを度外視するような身振りは一度

もたらなかつたな」と言つた

その際に五郎は桐野が西郷を尊敬し、西郷のために死も辞さない人物だと尊敬の念を込めて述べたところ、

（次郎長はその話をじっと聞いていたが「桐野も西郷も時代を知らなかつた。街

道にいれば、もはや西郷などは過去の人だと分かつたはずだ。お前が最後に別れた時に桐野が『来年は東京で会おう』と言つたというが、彼は本当に勝つつもりだつたのだ。だが、世間は変わつていただ。俺が親分などと呼ばれるのは、俺が時代と合わさうとしているからだ。俺が時代に合わなくなれば、桐野になるからだ」と言つてゐたと愚庵（五郎）は後ろに語つてゐた

た。自分は西洋の学問をしたわけでもないし、歐米を実際に見たわけでもない。昔からの日本の伝統には心から愛着があるが、それを今の時代にどのように残すのがよいかということも理解できない」と言つてゐた

そうは言つても、次郎長は明治維新後、社会事業に手腕を發揮し、横浜と清水港との定期航路線の開業、富士山麓の開拓などをしている。それは彼が侠客の時代は終わつたと思っていたからである。決して過去の成功体験に囚われるタイプではなかつた。静岡学問所の若手教師を呼んで英語塾も始めているが、これなどは特に「時代に敏感」な次郎長の面目躍如といつたところだらう。

子分は絶対に守る

では、次郎長のリーダーとしての素質はどうだつたのだろうか。もちろん、東海道の大親分と呼ばれた人物である。リーダーの素質がないわけがない。

実は次郎長はあまり人を斬らなかつた。例外の一つは次郎長を裏切り、その妻で

ある初代のお蝶を死に追いやった保下田久六との決闘である。尾張の畦道を歩いて近づいてきた久六を、刀を振るつて斬り倒した場面は村松梢風、村上元三などが名文でつづっている。

次郎長は裏切りを許さなかつたが、子分の名誉が傷つけられることも許さなかつた。

「親分になるには度胸と喧嘩が強いといふだけではだめだ。どんな下つ端でも一度子分になつたら、その男をかならず守るという心意気を示さなくてはならない。これはやうとしてできるものではない。自然にそらなるのだ。この男は下つ端だから他の一家に恥をかかされてもようがない、などというのでは他の子分がついてこない。どんな下つ端でも

かならず守ってくれるという気持ちをもたせることだ」と言っていた

次郎長は勢力争いに巻き込まれたときに、我が身を守るために、部下に危険を冒させる生き方をとくに嫌つた。

（鉄舟はあるとき、「よく鉄舟が次郎長を真人間にしたなどと言つたが、まつた

くの誤解である。次郎長は義理人情のためにはすべてを捨てる覚悟があり、それが姿に見えている。次郎長にはもし子分が辱められれば、どんなことをしてもそれを晴らすという覚悟があつた。すでに社会的に認められている自分にはそこまで捨てられない。次郎長はすべてを捨てることが平氣でできた。これは修行の問題ではない」と言つていた）

何でもない子分を守るためにお咎めを受けたこともある。これなどは普通の人はできるものではない。そこに次郎長が子分に頼られた理由がある。

（ある時次郎長は言つていた、「自分はまだこの世でやることがあるから、今は死れない、などという男は親分にはなれない」と）

私はこの生き方が現代日本でもつとも失われているのではないかと思っている。つまり、今の日本では上に立つ人、地位の高い人、家柄のよい人は身を挺して社会のために働くことをしていない。部下を守る上司がどれだけいるだろうか。

（失われた20年」とか言われる不景気の

中で進行していくリストラ。現場の人間が詰め腹を切らされ、役員が生き残ることも決して珍しくない。こうした行いは、すべて次郎長の生き方とは正反対のものである。

いや、今の日本に限らない。戦時中、陸軍士官学校を出た軍人は大尉などとして前線に送られた。しかし、陸軍大学学校を卒業したエリートの多くは幕僚として東京の陸軍省、參謀本部にて、戦死することがなかつたのである。

映画「炎のランナー」などにも描かれているが、第一次大戦、第二次大戦の際に、率としてもつとも戦死者の多かつたのがオックスフォード、ケンブリッジの卒業生であった。彼らの多くは少尉、小隊長であり、貴族の出身であった。このようなエリートが斬撃から軍刀を抜いて飛び出して行く。部下が命を惜しまずに戦つたのは当然である。

（自分は普通の人とは違う。生きて帰れば國の役に立つ」などと考えていては、こんなことはできない。

私はいわゆるノーブレス・オブリージ

ユはむしろ俠客の間の人生観の根柢にあつたのではないかと思つてゐる。

もちろん、次郎長自らが、一人一人の

子分が他人からどのような扱いを受けたかを知り、子分を辱めた相手に対しても思ふべきであるなどということはできない。

次郎長は大政などの腹心の子分にその役をまかせた。つまり、自分がやらないで、かならず親分は守つてくれる、恥を灌いでくれるという気持ちを子分に持たせたのである。

また、次郎長は義理人情には篤かつた

が仕事については私情を挟まなかつた。

（次郎長が厳しい面を見せたのは賭場であった。彼は本来、博打が好きだつた。明治になると自分では儲けることはなかつたが、賭場を開いて、子分にも儲けさせた。賭場でいかさまをすれば、半殺しになる。これが捷であつた。）

次郎長も江戸時代には盛んに賭場荒しを懲らしめた。明治に入ると、次郎長は温厚になろうと努め、事実多くの人に慕われた。しかし、いかさま博打だけは決して同情しなかつた。捕えられた博徒は

何とか逃れようと次郎長の方を見たり、助けを乞うこともあつたが次郎長は決して同情しなかつた）

博打は男の勝負で、いかさまをするものはそれなりの覚悟がなくてはいけない。つかまつて許しを乞うなどというのは彼の美学に反したのであつた。

男の美学に生きる

さて、次郎長は当時のリーダーについてはどうに見ていたのだろうか。

（鉄舟先生の西郷さんへの尊敬には一方ならないものがあつた。（西南）戦争が起きた時に、どのように決着するのかとあつた。先生は大久保（利通）さんもよく知つたが、賭場を開いて、子分にも儲けさせた。西郷さんを殺してもやむを得ないと決めていた』と（先生は）言つておられた。しかし、『心中では苦しんでおられたようだ』とも言つておられた。

大久保さんは心中を明かすような人物ではないが、振舞いに出ていたと先生は言つておられた。そのことについては山

県有朋さんとは根本的に異なつてゐた。大久保さんの心中を西郷さんも理解していたと思うと先生は言つておられたし、

海舟のことについては、

（鉄舟先生は勝海舟の政治的な能力を非常に高く買つてゐた。また頭のよさではなく勝にはかなわないとも言つておられた。先生が剣と禅にあれほど一生懸命になつたのは、自分がその方面で能力を発揮できると思っていたからだと聞いた

ことがある。勝さんも鉄舟先生を尊敬していましたよ。だが、勝さんは政治のことしか関心がなかつたようで、それ（政治家）以外の人物についてはあまり話したがらなかつた）

次郎長の話から見えてくるのは、いずれも己の美学に生きる姿である。そのためには命も惜しまない。今の言葉でいえば、ビジョンとなるのかもしれないが、ビジョンを越えた何かがそこにあるよう気がする。これがリーダーの素質のもつとも重要な点なのかもしれない。